C－52　和服寸法設定上の考察－長着と下着の衿の関係－

相女大学芸　川村キミ子　永井房子　○藤沢美智子

目的　半衿は、衿元だけの部分的な美しさだけでなく、和装全体の総合美として重要な部分である。長着と長じゅばんの衿は、互に揃っていることが外観上好ましい。そこで衿肩明き寸法、切り方を変化させて、両者のなじみぐあいを着装実験により比較検討したので、その結果を報告する。

方法　試料として長着にウール地、長じゅばんにアセテート地を用いた。衿肩明の切り方は、A・肩山線上、B・肩山より後身頃に2cm寄った位置、C・Aの型紙で出来上り衿付線にそって1cmの縫代を残す、とした。衿肩明寸法は、長着はそれぞれ8.5cmのもの3種類、長じゅばんは、それぞれ8.5cmと8.0cmのもの6種類を製作した。　キイヤ製標準型ボディに着用させて、18種類の組合せによる三つ衿間の衿幅の出方、三つ衿間のなじみぐあい、前面の半衿の出方を経験者3名により判定した。

結果　衿幅について－同種による組合せは、両者の衿折山が揃って好ましかった。長着Bと長じゅばんA・Cでは、三つ衿間で半衿が1～2cm出て好ましくなかった。三つ衿間のなじみぐあい－同種の組合せでは、同寸の切り方がなじみが良かった。長じゅばんBは、どの切り方にもほぼなじんだ。　長着Bと長じゅばんAでは、衿肩明止り付近で両者の衿折山が1.5～2cm離れ見苦しかった。前面の半衿の出方について－同種の組合せが好ましかった。長着A・Cと長じゅばんBとでは、肩山から5cm前方付近で半衿が極端にひっこみ、たるみじわが見られた。長着Bと長じゅばんA・Cとでは、半衿が肩山付近までも1cm内外出て見苦しかった。